

# 大学生アスリートの日常と多様性

## －体育会系の枠から脱する大学生アスリートたち－

渡邊 夏鈴 ( 筑波大学 )

### 1. 目的

本研究は、体育会系及び人間教育という枠組みに由来する「集団主義」などによって、抑圧を受けてきた自己の解放や自己呈示が学生アスリートから行われ始めたことを起点として、日常場面において学生アスリートはどのように自己呈示しているのか、「らしさ」の利用や払拭など、振る舞いの実践を調査することを通して、彼らの多様性を明らかにすることを目的とする。

### 2. 研究方法

- 1) 対象者：筑波大学の体育会部活動に所属する学生 10 人
- 2) 調査方法：半構造化インタビュー

### 3. 結果と考察

#### 1) 体育会系と学生アスリート

大学生アスリート自身が持つ「体育会系」への印象としてプラスとマイナスの両側面が語られたが、マイナスの印象においては、「絶対服従」「とりあえず言ったことを聞く」「自分以外の他者から決められて」などの言葉が並び、根幹に「受動的」という要素があった。それと対照的な存在として、「学生アスリート」が語られ、「自発的に」「自ら行動を選択」など「能動的」で良い印象が一貫してあることが分かった。

#### 2) 大学生アスリートの日常

大学生アスリートは、本来、自身が所属するスポーツコミュニティを中心として、体育会系的な性質を逸脱することのない狭いコミュニティ内を生きており、彼らの日常はその内側で完結していた。

#### 3) コМПレックスと反発

そんな中で、閉鎖的な本来のスポーツコミュ

ニティから、外のコミュニティへと積極的に踏み出していく大学生アスリートたちの存在がみられた。その要因は2つあり、1つは、スポーツや体育会系的な性質を逸脱することのない閉鎖された日常の中で生きること、それによって自分自身が他の領域に対して無知であり、スポーツのみの一面的な人間になるということに対するコンプレックスが存在したためであった。もう1つは、体育会系という枠組みにはめられること、またそれによって自己を抑圧されたり、自己をその括りで断定した見方をされることへの反発が存在したためであった。

### 4. 結論

総じてみると、大学生アスリートにとって、スポーツコミュニティの内側つまり「日常」とその外側という構造の中で、「閉鎖的な日常の外へ出ていくこと」それ自体が「らしさ」払拭の発露だったと言える。多様性の拡がりや内側からの脱出、言い換えれば、体育会系という枠を脱し、自己を解放する大学生アスリートたちの実践であった。

### 5. 主な参考文献

- 1) 荒井弘和・杉本龍勇・増田昌幸・釜野祥太郎・徳安彰, 2021, 「学生アスリートにおけるスポーツ・ライフ・バランスとメンタルヘルス：入試経路による比較」『スポーツ産業学研究』31(3): 341-349.
- 2) 小椋博, 1994, 「甲子園と日本人の『再生産』」江刺正吾・小椋博編『高校野球の社会学—甲子園を読む—』世界思想社, 161-182.
- 3) 杉本厚夫, 1994, 「劇場としての甲子園」江刺正吾・小椋博編『高校野球の社会学—甲子園を読む—』世界思想社, 15-38.